

Title	攻撃評価に評価者の不快感情が与える影響 : 調整要因としての加害者の集団カテゴリー
Author(s)	寺口, 司; 釘原, 直樹
Citation	対人社会心理学研究. 15 P.101-P.107
Issue Date	2015
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/54437
DOI	10.18910/54437
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

攻撃評価に評価者の不快感情が与える影響

—調整要因としての加害者の集団カテゴリー—

寺口 司(大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会)

釘原直樹(大阪大学大学院人間科学研究科)

加害者は自身の攻撃行動に対する観衆の評価によって、攻撃行動を選択するか否かを決定する。しかし、この攻撃評価に影響を与える個人内要因は検討されていない。そこで、本研究では評価者の状態的な攻撃性を高める不快感情について検討を行った。不快感情によって攻撃性が高まれば、同じように攻撃行動を示す他者に対してはネガティブな評価が減少すると考えられる。また、この影響を加害者の集団カテゴリーが調整するのか否かを検討した。本研究の実験デザインは 2(集団カテゴリー: 内集団条件、外集団条件)×2(感情状態: 不快条件、統制条件)の参加者間計画であった。その結果、加害者が評価者にとって外集団成員である外集団条件では、評価者にネガティブ感情が高まっているほど、加害者に対するネガティブ評価は低いことが示唆された。一方で、内集団条件では評価者の不快感情の影響は認められなかった。以上から、評価者の不快感情という変動的な要素は加害者に対するネガティブ評価を低減させるものの、内集団成員が加害者の場合にはその影響は認められず、内集団成員による加害者への評価は頑健で、かつポジティブなものである可能性が示された。

キーワード: 集団間葛藤、欲求不満-攻撃説、不快感情、社会的アイデンティティ理論、黒い羊効果

問題

攻撃評価の重要性

攻撃行動が生じた際には攻撃行動の当事者(i.e., 加害者・被害者)だけではなく、攻撃行動には積極的に関わらずにただその行動を観察する観衆が数多く存在する(e.g., 森田・清永, 1994; 寺口・釘原, 2013)。この観衆の中には加害者の内集団成員や加害者・被害者と関わりのない第三者も含まれる。

加害者はこれら観衆が自身の加害行動に対してどのように反応するのかを推測して行動する。Borden(1975)は、攻撃行動を行う場面において、観衆が女性よりも男性であり、平和主義よりも好戦的な人である場合に、より攻撃行動が促進されることを示している。また、Felson(1982)はインタビュー調査によって、攻撃行動を諷める第三者がいれば攻撃行動は抑制されるのに対して、扇動する者がいれば攻撃行動は促進されることを明らかにしている。これらの研究をふまえて大淵(1993)は、攻撃性が強調されるか抑制されるかは、観衆がその行動を好ましいと評価するかどうかによってある程度規定されるとしている。この点については、目標志向行動拡張モデル(extended model of goal-directed behavior; Perugini & Bagozzi, 2004; Richetin, Richardson, & Boykin, 2011)においても、攻撃行動の予測因として他者がどのように反応するかという社会的圧力を挙げている。このように、攻撃を行う上で、他者からポジティブな反応を得られるかどうかは加害者が攻撃行動を選択するうえで重要な要因である。

攻撃評価の個人内規定因

これまでの研究では攻撃評価に対しては攻撃に至るま

でのプロセス(e.g., Ferguson & Rule, 1983)や加害者の身体的魅力(e.g., Dion, 1972)などの状況的要因の分析がほとんどであり、個人内要因はほとんど検討されていない。その数少ない検討の 1 つが評価者の攻撃性の影響である。例えば、Gollwitzer(2004)の調査によれば、犯罪傾向の強い者は犯罪行動に対して寛容になることが示唆されている。また、磯部・菱沼(2007)は印象形成の観点から自身のもつ攻撃性が他者への評価にどのような影響を与えるかを検討している。磯部らは攻撃性として「外顕性攻撃(叩く・蹴るなどの身体的攻撃)」と「関係性攻撃(仲間はずれ・無視などの関係性を操作して傷つける攻撃)」の 2 種類の攻撃性を扱った。調査の結果、攻撃性が高い人は自身と同じ攻撃性を示す他者にはポジティブな印象をもち、自身と異なる攻撃性を示す他者にはネガティブな印象をもつことが明らかになった。

この攻撃性には不快感情が強く関連する。Berkowitz(1989)は、欲求不満(frustration)が攻撃行動を引き起こすとした欲求不満説(Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939 宇津木訳 1959)をより一般化し、欲求不満状況における不快感情こそが攻撃動因を高めるとした。さらに、この不快感情も怒りや憎しみに限らず、すべての不快感情が攻撃動因を高めるとしている(e.g., Berkowitz & Heimer, 1989)。そのため、評価者の不快感情は状態的な攻撃性を高め、攻撃評価をよりポジティブにすると予測される。そこで本研究では個人内規定因の 1 つとして、評価者の不快感情を検討する。ただし、この評価者の感情状態が攻撃評価に与える影響はあらゆる評価者に対して一様なのか、検討を要する。

調整要因としての集団カテゴリー

不快感情による攻撃性の高まりは加害者の内集団成員に対しては上記と逆の効果をもたらす可能性がある。攻撃行動とはそもそも道徳性基盤(moral foundations; e.g., Haidt & Graham, 2007)のうちの「他者を傷つけてはならない(harm)」に反する行動であるため、ネガティブに評価される。黒い羊効果(black sheep effect; e.g., Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988)によれば、内集団成員のネガティブな行動は外集団成員よりもネガティブに評価され、集団からの排斥へとつながる。この黒い羊効果を攻撃的反応の一種として捉えることができるのではないだろうか。つまり、他者を排斥する行為はその人物に損害を与える行為である。そのため、不快感情による攻撃性の高まりによって加害者の内集団成員は加害者により強い攻撃的反応、つまりネガティブな評価を示す可能性が示唆される。

一方で、加害者の内集団成員の感情状態は加害者の評価に影響しない可能性も示唆される。Linville(1982)の複雑性—極端性効果(complexity · extremity effect)によれば、外集団成員に比べて内集団成員とは接触回数が多くなる。そのため、内集団成員に対する情報はより多くなり、複雑なスキーマが構築される。このことから、内集団成員に対しては外集団成員と比べて評価や印象が変動しにくくなる。また、Crawford, Sherman, & Hamilton(2002)によれば、内集団に対しての認知は外集団に対してよりも一般化されにくい。以上のことから、内集団成員に対しては感情状態が影響をもたらさないとはいえる。

本研究の目的・仮説

本研究では、加害者の集団カテゴリーが攻撃評価に対する評価者の感情状態の影響を調整する働きをもつかどうか、特に内集団成員の場合にどのような効果をもたらすのかについて検討した。不快感情による攻撃性の増加(e.g., Berkowitz, 1989)から不快感情が生起しているほどに加害者に対してネガティブな評価は低くなると考えられる。しかし、この関係は加害者が内集団成員の場合には認められず、黒い羊効果(e.g., Marques et al., 1988)によってよりネガティブに評価される、もしくは、複雑性—極端性効果(e.g., Linville, 1982)によって評価者の感情状態が影響しない可能性が考えられる。

よって、仮説は、「(1)加害者が外集団成員の場合、評価者に不快感情が生起しているほど、加害者へのネガティブ評価は低い」、「(2a)加害者が内集団成員の場合、評価者に不快感情が生起しているほど、加害者へのネガティブ評価は高い」、「(2b)加害者が内集団成員の場合、評価者の不快感情の影響は認められない」である。

方法

実験デザイン・実験参加者

実験デザインは 2(集団カテゴリー: 内集団条件、外集団条件)×2(感情状態: 不快条件、統制条件)の参加者間 2 要因配置であった。

また、実験参加者は関西の国立大学生 74 名(男性: 26 名、女性: 48 名)であった。なお、実験参加者の平均年齢は 20.00 歳($SD = 2.80$)であった。

提示刺激

感情誘導刺激 本実験では感情誘導のために、International Affective Picture System(Lang, Bradley, & Cuthbert, 2008; 以下、「IAPS」)より不快情動喚起画像を 20 枚、統制画像を 20 枚選定し、使用した。

不快情動を喚起させる画像の選定は、実験者を含む、社会心理学の知識を持つ大学生男女 2 名ずつ計 4 名(年齢: $M = 21.67$, $SD = 0.41$)による話し合いで行った。検討場面では、実験と同様、暗室の状態でプロジェクターを用いてホワイトボードに同様のサイズ(110cm×90cm)の画像を提示した上で行った。そして Lang et al.(2008)の結果より、Valence 得点が低い(つまり Unhappy)画像から順に、20 枚が選出されるまで検討を行った。選定の基準は、「研究倫理の基準として、参加者に過度のショックを与えないものであること」、「暴力的でないもの」、「以上 2 点を踏まえた上で不快な情動を喚起させるもの」の 3 つであった。なお、暴力的な画像を選定から外したのは、本実験では感情誘導後に暴力場面映像を提示するため、同様の画像を先に提示することを避けるためである。本研究ではこれらによって選定された 20 枚の不快情動喚起画像を連続提示することで、感情誘導を行った。また、統制画像として、Lang et al.(2008)をもとに Valence 得点の平均点が中央値である 5.0 ポイントに近いものから順に 20 枚を選出した。

これらの画像を、まず画像番号を 5 秒間提示したあとに、選出した画像を 15 秒間提示し、その後、回答時間用スライドが 8 秒間提示されるものを作成した。なお、不快条件では不快情動喚起画像が 20 枚、統制条件では統制画像が 20 枚連続提示される。

暴力場面映像 本実験では、インターネット動画サイトに投稿された実際の攻撃場面を映像として提示した。動画の選出には動画情報サイトの Craving Search(URL: <http://craving.fooooo.com/>)にて、暴力に関連する単語(e.g., 「暴力」、「喧嘩」、「fight」、「brawl」、「драка(ロシア語で fight の意)」、「Schlägerei(ドイツ語で fight の意)」)を用いて検索を行い取得した。

動画を選定する際に、「1. 一目で攻撃しているとわかるもの」、「2. 加害者と被害者は男性であること」、「3. 1 対 1 であること」、「4. 大学生であるとみられるもの」、「5. 加

害者が被害者を一方的に攻撃しているシーンがあるもの」を基準として選定した。なお、条件 2 については女性の暴力映像が少なく特殊性が高かったため、条件 3 については加害者が複数存在すると評価が複雑になってしまうのでそれを避けるため、条件 4 については以後の本実験で「日本の大学生」であることを教示するため、条件 5 については加害者と被害者をはっきりさせるためであった。これらを基準に計 8 個の動画を選出した。

また、本実験は加害者への評価を好ましさ(嫌悪感)を用いて尋ねる。そのため、顔の魅力度の影響などを排除するために、収集した 8 個の映像に対して顔にモザイク処理を施した。これは、映像がほとんど海外のものであることもあり、国籍がわからないようにする目的もあった。また、海外の映像であると悟られるような建造物、落書きなどにも同様にモザイク処理を施した。さらに、先の条件 5 を満たすために、一方的に攻撃しているシーンのみを抜き出し、それぞれ 8 秒間となるように処理を施した。加害者に注目してもらうためにも、暴力場面の映像の初めにスクリーンショットを提示し、加害者が A、被害者が B であることを矢印で 3 秒間提示した上で、「こちらの男性(A)に注目してください」と画面上に 3 秒間提示するように編集した。

実験では以上のように編集した動画を用いて、まず、5 秒間映像番号を提示し、スクリーンショットを 6 秒間、そして暴力場面の映像を 8 秒間提示し、その後、「Replay」の文字を 3 秒間提示した後もう 1 度同じ映像を 8 秒間提示した。その後、質問紙への回答時間を 105 秒用意した (Figure 1)。

これらの処理を、選出した 8 本の暴力場面映像に行い、実際の実験ではこの中から 2 本を選出し、使用した¹⁾。

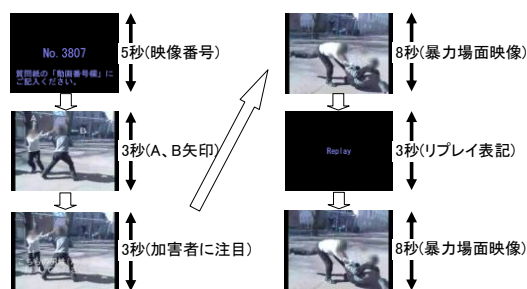


Figure 1 暴力場面映像の流れ

質問紙

感情状態 感情誘導前後の参加者の感情状態を測定するために、多面的感情状態尺度(寺崎・岸本・古賀, 1992)の「抑鬱・不安」、「敵意」、「倦怠」、「活動的快」、「非活動的快」、「親和」を使用した(60 項目 4 件法)。

なお、本研究では同じ質問を 2 度尋ねることによるキャ

リー・オーバー効果为了避免するために、それぞれの因子を予備調査²⁾により 2 つの等質な尺度(セット A・セット B)へと分割して使用した。具体的には、半数の参加者には感情誘導前にセット A を、感情誘導後にセット B を回答してもらい、もう半数の参加者には感情誘導前にセット B を、感情誘導後にセット A を回答してもらった。

ただし、等質な尺度ではあるものの異なる尺度であるため、分析の際にはセット A とセット B をそれぞれで標準化した点数に変換した($\alpha > .66$)。

加害者へのネガティブ評価 高木(2004)が使用した否定的対人感情項目より、「嫌悪」因子における因子負荷量の大きい上位 3 項目、「不快な存在だ」、「信用できない」、「むかつく」を採用した(7件法)。

正当性推測 提示場面における暴力の行使が正当な理由によるものだったかを「A の行動は正当な理由により行ったものだと思いますか。」という 1 項目 7 件法で参加者に尋ねた。

被害量推測 被害者がどの程度の被害を受けたように見えるかを「相手(B)はどの程度の被害を受けたと思いますか。」という 1 項目 7 件法で参加者に尋ねた。

攻撃性 日本語版 Buss-Perry 攻撃性尺度(安藤・曾我・小西・山崎, 1997)の身体的攻撃因子 6 項目 5 件法で尋ねた。

手続き

本実験は感情誘導を行うセクション 1 と暴力場面映像を提示するセクション 2 に分けて行われた。なお、実験の意図を隠すために、実験参加者にはそれぞれ「写真の構図がもつ心理的影響に関する実験」と「暴力事件に対する意識調査」という別々の実験であるというカバーストーリーを提示した。また、実験は 1~3 人の参加者に対して同時に実施されたが、参加者の間には仕切りが設置されており、互いの姿は見えない状態であった。

セクション 1 サクラの実験者が「写真の構図がもつ心理的影響に関する実験」として実験参加者に、予備調査で分割した感情状態尺度(セット A・セット B のいずれか)に回答を求め、その後、感情誘導刺激をプロジェクターで提示した。このとき、不快条件ではネガティブな画像を、統制条件では中性的な画像を連続提示し、それぞれに対して印象評定を求めた。

セクション 2 実験者が交代し、これから「暴力事件に対する意識調査」を行うと説明した。そして、多面的感情状態尺度のもう片方のセットに回答を求めたあと、これから提示する暴力映像が実際に起きた暴力事件のものであることを教示した。さらに、内集団条件では「加害者は〇〇大学(参加者の所属大学)の学生」と教示し、外集団条件では「加害者は××大学(参加者の所属していない大学)の学生」と教示した³⁾。教示終了後、予備調査で選

定した2つの暴力映像を提示し、それぞれについて加害者へのネガティブ評価、正当性推測、被害量推測への回答を求めた。なお、提示した2つの映像は順序効果を考慮し、カウンターバランスをとった。

評定後、攻撃性についても回答を求め、ディブリーフィングを行って終了した。

結果

以下の分析はR 3.1.1で行われた。

因子分析

本研究では感情状態を測定するために6因子を使用した。そこで、二次因子を検討するため、探索的高次因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。

その結果、抑うつ・不安因子、敵意因子、倦怠因子で構成されるネガティブ感情因子、活動的快因子、非活動的快因子が検出された。そこで以後の分析では、ネガティブ感情得点として、抑うつ・不安因子、敵意因子、倦怠因子の3つの平均得点を、ポジティブ感情得点として活動的快因子、非活動的快因子の2つの平均得点を使用した。

感情誘導操作チェック

感情誘導が実験者の意図通りに働いていたのかを検討するため、誘導前後のポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点を従属変数に、2(感情状態: 不快条件、統制条件)×2(誘導前後: 誘導前、誘導後)の混合2要因分散分析を行った。

その結果、ポジティブ感情得点については有意な交互作用が認められ($F(1, 62) = 7.11, p < .01, \eta^2 = .01$)、下位検定の結果、不快条件において誘導前($M = 0.31, SD = 0.57$)よりも誘導後($M = -0.02, SD = 0.81$)のほうがポジティブ感情得点有意に低いことが示された($F(1, 31) = 15.12, p < .001, \eta^2 = .05$)。しかし、ネガティブ感情得点については主効果・交互作用ともに認められず、感情誘導は意図通りに働いていないことが示唆される。そこで、以後の分析では感情状態条件は使用せず、実際に誘導前後でどれほど感情状態が変化したのかを、前後の得点の差分を用いて検討した。

仮説の検証

本研究の仮説を検証するため、加害者へのネガティブ評価を目的変数とする、階層的重回帰分析を行った。なお、本実験では2種類の映像を使用したものの、変数には先に提示した映像についての得点のみ、投入している。説明変数には、第1ステップに参加者の要因である、性別、年齢、攻撃性、同時視聴人数(1~3人)、第2ステップに動画の要因である、正当性推測、被害量推測、第3ステップには実験条件であるカテゴリ条件とポジティブ感情差分(誘導後得点 - 誘導前得点)、ネガティブ感情差

分、第4ステップにはカテゴリ条件とポジティブ感情差分、カテゴリ条件とネガティブ感情差分それぞれの交互作用項を投入した。

その結果、第3ステップではネガティブ感情差分の有意な負の影響($\beta = -.24, p < .05$)が認められ、第4ステップでは集団カテゴリ条件の影響の傾向($\beta = .17, p < .10$)と交互作用項の影響が有意に認められた(ポジティブ感情差分: $\beta = -.28, p < .05$; ネガティブ感情差分: $\beta = -.32, p < .05$; $\Delta R^2 = .05, p < .05$; Table 1)。まず、ポジティブ感情差分とカテゴリ条件との交互作用について単純傾斜を検討したところ、内集団条件においてポジティブ感情差分の正の傾斜の有意傾向は認められた($\beta = .43; p < .10$)。また、ネガティブ感情差分とカテゴリ条件との交互作用について単純傾斜を検討したところ、外集団条件においてネガティブ感情差分の負の傾斜が認められた($\beta = -.86; p < .001$; Figure 2)。

Table 1 加害者へのネガティブ評価に対する階層的重回帰分析

	Step1	Step2	Step3	Step4
性別(1 = 女性)	.01	-.13	-.10	-.11
年齢	-.21 †	-.04	-.07	-.09
攻撃性	-.28 *	-.29 **	-.26 *	-.27 **
同時視聴人数	.19	.20 *	.29 **	.33 **
正当性推測		-.44 ***	-.41 ***	-.38 ***
被害量推測		.20 *	.20 †	.25 *
ポジティブ感情差分			.01	.20
ネガティブ感情差分			-.24 *	.03
集団カテゴリ条件 (1 = 外集団条件)			.15	.17 †
ポジティブ感情差分× 集団カテゴリ条件				-.28 *
ネガティブ感情差分× 集団カテゴリ条件				-.33 *
調整済みR ²	.14 ***	.39 ***	.44 ***	.49 ***
ΔR^2		.25 ***	.05 *	.05 *

注1) 数値は標準化偏回帰係数

注2) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

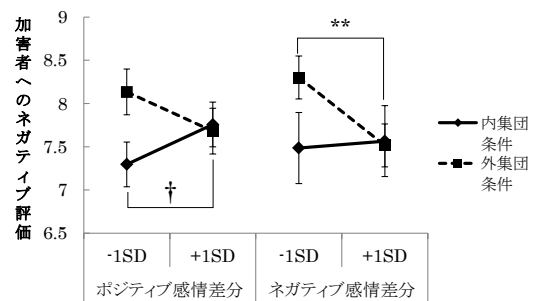


Figure 2 感情差分と集団カテゴリの交互作用項についての単純傾斜

考察

本研究は攻撃評価に対する、評価者の不快感情の影響を検討すること、そしてこの影響に対する加害者の集団カテゴリーの調整効果を検討することを目的とした。仮説は、「(1)加害者が外集団成員の場合、評価者に不快感情が生起しているほど、加害者へのネガティブ評価は低い」、「(2a)加害者が内集団成員の場合、評価者に不快感情が生起しているほど、加害者へのネガティブ評価は高い」、「(2b)加害者が内集団成員の場合、評価者の不快感情の影響は認められない」であった。

本研究の結果より、仮説(1)と仮説(2b)が支持された。まず、加害者が外集団成員の場合には、評価者にネガティブ感情が高まるほど加害者へのネガティブ評価は低いことが示された。これは攻撃の正当性などの攻撃場面の要因や、元々評価者がもっている特性的な攻撃性を統制したうえでなお示された結果である。このことから、攻撃評価を規定する個人内要因として、評価者の不快感情が攻撃評価をよりポジティブにする働きをもつことが示唆された。

一方で内集団成員が加害者の場合には不快感情の影響が認められなかった。これは Linville(1982)が主張する通り、スキーマの複雑性の違いであると考えられる。本研究では集団カテゴリーの操作として、加害者が所属する大学名を操作している。そのため、加害者が内集団成員である場合には、自分が所属する大学という普段から接触する集団となり、加害者が外集団成員(i.e., 他大学の学生)である場合よりも複雑なスキーマが構築されていると考えられる。

以上から攻撃評価に対する評価者の不快感情の影響が加害者の集団カテゴリー間で異なることが示された。外集団成員が加害者である場合には評価者の個人内要因の1つである不快感情が高くなるほどネガティブな攻撃評価が低減したものの、内集団成員が加害者である場合にはその影響が認められなかった。つまり、加害者の内集団成員による攻撃評価は評価者の感情状態という変動しやすい不確定要素による影響を受けにくい、強固なものであることが示唆された。また、本研究の結果では有意傾向ではあるものの、加害者が評価者の内集団成員である場合には、外集団成員である場合よりも評価がポジティブであるという内集団ひいきの傾向が認められた。他の研究においても加害者の内集団成員は、外集団成員よりも加害者をポジティブに評価することは示唆されている(e.g., Leidner, Castano, Zaiser, & Ginner-Sorolla, 2010; 寺口・釘原, 2012)。このような研究からも、加害者の内集団成員たちは加害者に対して強固な内集団ひいきを行っていることが示唆される。

これらの結果は攻撃行動生起の際の重要な問題に繋

がっている。加害者は攻撃行動を起こす際に、観衆の反応を推測して行動するかどうかを決定する(e.g., 大淵, 1993; Perugini & Bagozzi, 2004; Richetin et al., 2010)。加害者の内集団成員には加害者をよりポジティブに評価するバイアスが存在するというのであれば、観衆に自身の内集団成員がいるだけで、加害者は攻撃行動を選択しやすくなる可能性がある。さらに、不快感情が高まるほどに、評価者は加害者が外集団成員であっても、加害者が内集団成員のときと同程度にポジティブに評価するようになる。外集団の観衆(i.e., 第三者)は攻撃行動に対してネガティブな評価を下し、攻撃を抑制する行動を起こしやすいという点で重要な存在である(e.g., Levine, Taylor, & Best, 2011; Parks, Osgood, Felson, Wells, & Graham, 2013; 寺口・釘原, 2013)。評価者の不快感情が外集団成員の攻撃行動のポジティブな評価に繋がるとすれば、これは大きな問題であり、今なお実際に引き続けている戦争やテロのような集団間葛藤の一部を説明する可能性が示唆される。

なお、本研究では、加害者が内集団成員の場合に、ポジティブ感情が高まるほど、加害者に対してネガティブな評価が高まることが示された。これは統計上、有意傾向であるものの、積極的に解釈をするならば、ポジティブ感情によって状態的な攻撃性が減少したことによる結果であるとも考えられる。つまり、内集団成員に対する印象は変動しにくいものの、感情による影響がないわけではなく、感情の強度次第では内集団成員が加害者の場合においても評価に影響を及ぼす可能性が指摘される。この点については更なる検討が必要と言えるだろう。

課題・展望

本研究にはいくつかの課題が残されている。まず、本研究では不快感情と攻撃評価の関係を媒介すると考えられる状態的な攻撃性を測定していない。そのため、不快感情によって攻撃性が高まり、その攻撃性が攻撃評価に与え、そしてその影響が加害者の集団カテゴリーによって異なる、というプロセスを主張するまでには至らない。そのため、今後の検討として状態的な攻撃性が不快感情と攻撃評価の関係を媒介するか否かを実証的に検討する必要がある。

また、本研究では感情操作が意図通りに働いていないために、感情得点の差分を説明変数とした。そのため、ネガティブ感情が高まっていない参加者のなかには不快感情喚起画像を見た参加者も統制画像を見た参加者も含まれている。厳密に因果関係を検討するうえでは、確実に不快感情を生起させるような手続きを使用する必要があるだろう。

以上のような課題点はあるものの、外集団成員による攻撃行動に対してのネガティブ評価が評価者の不快感

情によって低減する可能性が示されたことは、攻撃行動抑止の観点からみて重要な知見を提供することになったと言えるだろう。

引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・小西賢三・山崎勝之 (1997). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成(1) - 大学生のデータによる因子的妥当性・信頼性の検討 - 日本心理学会第 61 回大会発表論文集, 903.
- Berkowitz, L. (1989). Frustration-aggression hypothesis: Examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.
- Berkowitz, L., & Heimer, K. (1989). On the construction of the anger experience: Aversive events and negative priming in the formation of feelings. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, **22**. Orlando, FL: Academic Press, pp. 1-37.
- Borden, R. J. (1975). Witnessed aggression: Influence of an observer's sex and values on aggressive responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 567-573.
- Crawford, M. T., Sherman, S. J., & Hamilton, D. L. (2002). Perceived entitativity, stereotype formation, and the interchangeability of group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1076-1094.
- Dion, K. K. (1972). Physical attractiveness and evaluation of children's transgressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **24**, 207-213.
- Dollard, J., Doob, L., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven: Yale University Press.
- (ドラード, J., ミラー, N. E., マウラー, O. H., & シアーズ, R. R. 宇津木 保 (訳) (1959). 欲求不満と暴力 誠信書房)
- Felson, R. B. (1982). Impression management and the escalation of aggression and violence. *Social Psychological Quarterly*, **45**, 245-254.
- Ferguson, T. J., & Rule, B. G. (1983). An attributional perspective on anger and aggression. In R. G. Geen, & E. I. Donnerstein, (Eds.), *Aggression, theoretical and empirical reviews: Vol. 1. Theoretical and methodological issues*. New York: Academic Press, pp. 41-73.
- Gollwitzer, M. (2004). Do normative transgressions affect punitive judgments?: An empirical test of the psychoanalytic scapegoat hypothesis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1650-1660.
- Haidt, J., & Graham, J. (2007). When morality opposes justice: Conservatives have moral intuitions that liberals may not recognize. *Social Justice Research*, **20**, 98-116.
- 磯部美良・菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連—印象形成の観点から パーソナリティ研究, **15**, 290-300.
- Lang, P. J., Bradley, M. M., & Cuthbert, B. N. (2008). International affective picture system (IAPS): Affective rating of pictures and instruction manual. *Technical Report A-8*. Gainesville, FL: University of Florida.
- Leidner, B., Castano, E., Zaiser, E., & Giner-Sorolla, R. (2010). Ingroup glorification, moral disengagement, and justice in the context of collective violence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **36**, 1115-1129.
- Levine, M., Taylor, P. J., & Best, R. (2011). Third-parties, violence and conflict resolution: The role of group size and collective action in the micro-regulation of violence. *Psychological Science*, **22**, 406-412.
- Linville, P. W. (1982). The complexity-extremity effect and age-based stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 193-211.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. (1988). The 'black sheep' effect: Extremity of judgements towards in-group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 1-16.
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新訂版 いじめ—教室の病 金子書房
- 大淵憲一 (1993). 人を傷つける心: 攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- Parks, M. J., Osgood, D. W., Felson, R. B., Wells, S., & Graham, K. (2013). Third party involvement in bar-room conflicts. *Aggressive Behavior*, **39**, 257-268.
- Perugini, M., & Bagozzi, R. P. (2004). The distinction between desires and intentions. *European Journal of Social Psychology*, **34**, 69-84.
- Richetin, J., Richardson, D. S., & Boykin, D. M. (2011). Role of prevolitional processes in aggressive behavior: The indirect influence of goal. *Aggressive Behavior*, **37**, 36-47.
- 寺口 司・釘原直樹 (2012). 正当化装置としての正義: 『正義』が攻撃評価に与える影響 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 194.
- 寺口 司・釘原直樹 (2013). 攻撃抑止における第三者の重要性 対人社会心理学研究, **13**, 71-81.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.

註

- 1) 選出の際には、関西の国立大学生・大学院生 19 名 (男性 9 名、女性 10 名; 年齢: $M = 22.72$, $SD = 1.93$) に対して、8 個の映像の印象を評定するように求めた。その結果から、印象に有意な差が認められず、また天井効果・床効果も認められず、かつ対象が大学生に見える 2 本の映像を選定した。
- 2) 関西の国立大学生 119 名 (男性 26 名、女性 93 名; 年齢: $M = 20.51$, $SD = 4.75$) を対象に、現在の感情状態について 60 項目すべてに回答するように求めた。その後、平均値をもとに 2 つの尺度 (セット A・セット B) へと分割した。結果、信頼性はすべての因子で $\alpha_s > .77$ となり、また、セット A・B の各因子の相関は $r_s > .82$ となったため、信頼性と妥当性が確認された。
- 3) 大学の特性による影響を排除するため、外集団条件では、参加者に「東京大学」、「京都大学」、「名古屋大学」、「九州

大学」、「北海道大学」、「東北大学」、「早稲田大学」、「慶応大学」の各大学の学生として提示した。各参加者はこの中の

1つの大学が暴力場面映像の加害者が所属する大学として教示された。

The effect of evaluators' negative affect on their estimation of aggressive behavior in others:

The moderating role of aggressors' group category

Tsukasa TERAGUCHI(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Japan Society for the Promotion of Science*)

Naoki KUGIHARA(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Aggressors typically determine whether or not to aggress by judging the reaction of onlookers to their hostile behavior. However, previous research has not evaluated how individual factors affect this estimation. In the present study, we investigated to what extent evaluators' negative affect acted to increase the state aggressiveness of evaluators. We hypothesized that the more evaluators' negative affect increased in aggression, the more the negative estimation of aggressors would decrease. In addition, we examined whether or not this effect was moderated by aggressor category. A 2 (group category: ingroup condition vs. outgroup condition) x 2 (participants' affect: negative vs. neutral) between-subjects factorial design was used. Results revealed that within the outgroup condition, the more the negative affect of participants increased, the more participants positively estimated aggressors. On the other hand, no effect of negative affect on participants' estimation was observed within the ingroup condition. These findings suggest that evaluators' negative affect reduces the negative estimation of outgroup aggressors, but not that of ingroup aggressors, implying that the estimation of aggressors by ingroup members is robust and positive.

Keywords: intergroup conflict, frustration-aggression hypothesis, negative affect, social identity theory, black sheep effect